

古き良き東京

田村明

生まれてからずっと大都市の中に育ってきたぼくにとって、都市の記憶は壮大な夢でもなく、またよごれすすけた顔龐でもない。記憶の中の都市は甘酸っぱい幼年から少年期の追憶の中にある。

東京も山の手と言われる地区か郊外に住んでいた私の周りには、原っぱという子供たちの遊び場が方々に空いていた。時々それが建築用地になり、あるいは鉄条網をはってしめだされるのはつらかったけれど、また少し小さくて不便でも別の原っぱを見つけるのである。

東京でも杉並あたりの郊外へ行くと、麦畑が広がり、肥溜めがそこそこにある。今の善福寺川は幅は狭いが岸辺は草がいっぱいで手をのばせば水にとどく。川の幅いっばいに藻が生えてヒルがぎっしり藻に吸いついており、水はとうとうと流れている。川に落ちてもしたら急流に流されて、その上ヒルに体中の血を吸われてしまうとおどかさされた。ちょっとこわいが緑の草と藻の川だった。そういえばこの川のそばの原っぱで野球をやっていたボールを追ってドンブリと川に飛込んでしまったことがある。体がまるく水の中で一回転したとき、橋の上から兄貴が手を出してくれた。その手につかまって助かったと思ったがとたんヒルに血を吸われてはいないかと身震いがした。東京の区部でもそんなのどかな風景がいくつもあった。今の善福寺川は川幅は広く、ブロック積の護岸でかこわれて、ふだんは水がチョロチョロ下の方を流れるだけで、とても水に手をひたせるものではない。川のまわりはすべて鉄柵、水を早く流してしまおうというだけの河川設計も問題だし、子供のしつけはともかく、管理責任だけを追求する人びとと共同していつまらなくしてしまった。

小学校は、青山師範の附属小学校、現在の学芸大の附属小学校に入った。ここは入試があって、メンタルテストや口答試問がある。おまけに最後には、くじ引きがある。いくらテストができて、く

じ引きでおとされてしまう。袋に入ったぬり物の箸を自分でひくと先に白い紙がついていた。合格おめでとうといわれた。でも、袋の中に白い紙がはがれて落ちなくてよかったなと瞬間思った。

小学校の間にぼくの家は四ヶ所変わった。その上、小学校自体が、ちょうど6年間の半分の3年を終えたところで、学校ごと青山から郊外の世田谷に引越しをした。したがって学校は同じ、クラスメートも同じ、担任の先生一人の持ち上りで6年間変わらないのに、家から小学校へかようルートは、5通りあったことになる。おまけに、同じ家から学校へ通うのも、歩いてゆく方法をとったり、電車に乗ったりしたので、6年間に8通りの方法とコースで通った。このうち2コースは全部徒歩だがあとの6コースは電車に乗っていた。一番遠いのは西荻窪の北の善福寺池の近くから、新宿、渋谷で乗換えて、東横線の現在の学芸大まで、そこからまた歩いて15分近くというコースをかよった道である。ゆうに1時間半近くかかった。その上いろんな道を歩いたり、途中で遊びをしたり、女の子を待ったり、パン屋によったり、当時走っていた東横線のガソリンカーにわざわざ乗りたくて待っていたり、友だちの家に寄ったり、往復の時間は今から考えるとなかなか大変なものであった。

そんな小学校時代の中でも、とくに記憶にハッキリ残っている幾つかの場所がある。そのひとつは、原宿から青山通りへぬける表参道である。小学校1年生のとき、恵比寿に近い上智というところに住んでいた。そこから青山まで歩いても通えるのだが、1学期のほとんどを百日ゼキで休んでしまったので、親が小さくてかわいそうと思ったのか電車の定期を買ってくれて、恵比寿まで出て原宿までの電車に乗り、表参道を歩いて学校へ通った。表参道を通う友達はたくさんいた。原宿から青山通りまで約1キロ。この短い区間だけを往復している青バスというバス路線がある。そこをバスに乗る

友人もいたが、私は参道を歩いていた。現在もある大きな櫟の並木の広い参道はたまたま青バスが通る以外、あまり車は通ってない記憶がない。周りは、同潤会のアパート以外はたいてい高い塀をめぐるした屋敷町だった。まさか現在まで25年間も鉄筋アパートの住いをするとはその当時はまったく考えなかったが、戦後初めて鉄筋アパートが現れた昭和20年代の後半に、ああ参道にあった同潤会アパートがそれだったのだと記憶をよびさされた。しかし、それにしても新しい鉄筋アパートはまったくただ四角いコンクリートの箱というだけで、ポツンと建っていた。それにくらべれば、参道の同潤会アパートは、参道の広いスペース、櫟の並木、そしてアパート自体も、何か独特の風格があり、緑も配置されていた。それなりに周辺環境を考えていたように思う。

子供のころ家の周りなどけっこうキッチボールなどをして広いと思ったところが現在行ってみると、あまりに狭いのにびっくりする。たしかに、自分の方がちっちゃな子供ではなくなっているの、スケール観がちがうのである。ところが、あそこも広いと思った表参道は今見てもけっこう広い、だから小学校1年生の目には、とてつもなく広く見えたことだろう。現在の青山通りは、東京オリンピックによる拡幅で、以前は現在の三分の一強と言ったところだった。もちろん市電が通り、メインストリートではあったが、それを考えると表参道は当時から現在の広さで、まったくシンボリックなスケールをそなえていたわけである。ぼくらの小学校2年生までは、天皇の行幸は、馬車による正式の^{うら}薄(行幸の行列)だった。先導の天皇旗をたてた騎兵が走り、大ぜいの美しい近衛騎兵に守られて、濃いあづき色の^{うら}薄が静かにすぎ、おつきの馬車がゆくのは、おもちゃの兵隊のように美しかった。もっともわれわれは沿道にならばせられて、頭を上げてはいけないうことになっていただけ

ど、皆、首をひねって上目づかいに行列をながめたものである。青山通りから表参道にかかると大きな石燈籠が二基あるが、樺並木の中の広い道をあの近衛騎兵と馬車の行列がゆくのは、どんなに絵になる景色であったろう。祭日の日は、学校へきて式をすると、紅白の校章の入った菓子をもらうのがたのしみだった。それを白いハンケチにつつんでの帰り道、参道は礼服にいっぱい勲章をつけた軍人たちであふれていた。將軍たちだって当時は自動車などには乗らず参道を歩いていたものだった。美しい絵巻のような風景で、それが七五三になると、かわいい男の子のちっちゃな軍服に変わった。

しかし、まもなく馬車の^{ろば}はやめになって、自動車による^{ろば}式^{ろば}薄になり、スピードアップされた。簡単すぎて淋しくなった。その頃いわずの2.26事件がおきたのである。時代の風が冷たく吹きだしたのを小学生でも感じないわけにゆかない。絵巻物のような馬車や、オモチャの兵隊のような大礼服は、自動車に、戦車に、重い軍靴の音に変わっていった。

表参道は広くて立派だが、帰り道はあまりこの参道を通らない。裏参道と称して、まがりくねった住宅地の中を探して歩いてゆくと原宿の裏口に出る。そのいろんなルートを見つれたり、途中の崖に宝物をかくしたりするのがたのしかった。町のすみずみを歩いてみたくなる性癖はそのころついたのかもしれない。そんないろんなルートを通ったり歩いたりして、町や地域についての何となくの関心が養われたように思う。時に迷い子になりかけて、またバツと道を発見するのは、それなりにスリルがある。都市を知るには、何といても、自分の足でじかに歩いてみるのが一番だ。

学校が移転して、小学校4年からは参道を通わなくなった。そして東京の大空襲で、参道の樺はまる焼けになったし、青山通りから参道を通して明治神宮に逃げた人たちはぜひ分参道の入口のところまで死んだ。青山にも住んでいたぼくら

は、そのころまで住んでいたら参道で焼け死んで、こんな文章を書くこともなかったかもしれない。それにしてもどうしてあの広い参道でかえって人が死んだのだろう。細い裏道づたいに反対の青山墓地へ逃げた人は助かったのである。広い参道の入口は風が舞って、それに巻きこまれて死んだようである。だから、防災屋がただやたらと道路を広くしろとか、路をきめろとかいうことには、ぼくは体験的にあまり信用していない。避難はもっと多様な方法により、その時の状況によらなければならない。それにはふだん、いろんな道を歩いて、家の近くをよく知っておくことである。表参道だけでなく、ぼくらの言うところの裏参道を知らなければならない。役所の言うところの避難空地か、避難路は一応頭に入れておかないといけないだろう。

先日、大阪市の部長さんと話していたら、偶然ぼくの小学校の後輩であることが分った。参道を走る青バスのきれいな車掌さんが今でも忘れられないと言う。しかし、「いわゆる原宿族とか、ファッションの原宿とかいうのは、本当にあの原宿なんですか、いったいそれは原宿のどこなんですか」と聞かれた。たしかにあのころの静かな屋敷街と人どおりのない広い参道だけしか知らないと、原宿の変わりようはまったくおどろくばかりである。たしかに町は動いている。樺はふたたび芽をふき、大きく育って変らないが、参道を中心に町はまったく変わった。表参道と青バスを昔の記憶の中にとどめている人びとにとって、今の原宿はまったく別のものかもしれない。しかし、参道も樺も古ぼけた同潤会アパートも昔と変わってはいないのである。

こんな記憶の中の町はいくつかある。そのころ渋谷方面から青山まで通ってくるグループもあった。その連中と渋谷にも出た。ハチ公が生きていて頭をなでたが、灰色っぽい大きなおとなしい犬であった。じっさいは秋田犬だからそんなに

大きかったわけではない。やはりぼくの方が小さかったのである。渋谷の駅は、今のような駅前広場は表裏ともゼロだった。国電の駅の改札口を出たところが市電の終点ですぐ乗換えられるが、市電の線路ぎりぎりの幅しかなく、路を渡るとすぐ前が二幸と東京パンで、二幸の中から玉川電車が溝ノ口と下高井戸に向けて出ていた。つまり広場などというものはなく、国電の駅と二幸とのすき間に市電がわりこんで終点になっていただけで、そこにハチ公が巣くっていたわけである。あまりに記事がないため、忠犬ハチ公の話は創作されたのだと言う。立派な本まで出た。やはり平和だったのだろう。ぼくらちびっ子のガキどもに頭をなでられたりさわられても、ちっともいやがりもしない人なつっこいおとなしい平和な犬だった。渋谷の今の東横デパートの側も広場などはなく、甘栗太郎が、甘いおいしそうな香りをいつも発散していた。戦後、駅の西側は現在のように広大な広場ができたし、広い街路が走っている。市電は都電となったが早くなくなり、玉川電車が移動し、すでに数年前に姿を消し、今は地下鉄化した。都市の変動をこの渋谷についてぼくだけの記憶をたどってみても、ひとつの話が書けるほどである。乗降人員の増加とモーターゼーションが町の姿を一変させたのである。

中学はもっと東京の都心で議事堂や首相官邸を間近に見る東京府立一中だった。しかし一生東京だけに住みつくのではいやだなと思った。どこか田舎とかふるさとというかんじがほしかったのである。戦中戦後の3年をすごした静岡の町はそのいみでまた思い出深い。南国的な市役所の塔のヴォールト。桜並木の城の内壕、賤機山の真下の朱ぬり浅間さん。そして今よりずっと鮮明な富士山。記憶の中の都市として静岡もぼくにとつてのアルトハイデルベルグであり忘れぬところであるがもう紙数がない。